



ヨエルの預言は「老人たちよ、これを聞け」(1:2)という言葉で始まっていますので、高齢者となった私に呼びかけたものと心得て読みたいと思います。そして先祖から、子孫へ、また後の世代にという言葉から察するに、老人は歴史を踏まえ、後世に継承していくべき事柄の語り部として生きよと勧められているように感じます。

ペトエルの子ヨエルはいつ、どこで活躍したか、歴史的背景は不明ですが、捕囚から解放され、帰還はしたものの、カルデア人の支配のもとに、ユダ(Yehud)と呼ばれるエルサレムを中心とする狭い地域(紫色)に住み、ギリシアという地名が出始めた頃と想定されます。

ヨエルは戦争によって、国土が荒廃し、飢餓を体験した記憶を生々しくよみがえらせています。強大な外敵を特定してはならず、**かみ食らうイナゴ、移住するイナゴ、若いイナゴ、食い荒らすイナゴ**と呼び、容赦なく絶滅させていく戦争の恐怖を述べています。さらに、獅子、雌獅子のように襲い、餌食にし、略奪し、破滅させる、軍隊の突撃、突進の凄まじさを見事に表現しています。その中で、自然の果実、穀物の恵みを断たれ、なす術もなく飢え、乾く民の姿をも描いています。戦争体験、被災体験を迫力を持って伝えています。そして、二度と戦争にならないように、目を覚ませと言うのです。



このような危機的状況にあって、ヨエルは **断食を布告し、聖会を召集し／長老をはじめこの国の民をすべて／あなたたちの神、主の神殿に集め／主に向かって嘆きの叫びをあげよ。(1:14)**と、まず民が心を合わせて神に祈り求めるように勧めています。

従来は集会と呼んでいた言葉を「聖会」とヨエルは言っています。続いて、**ああ、恐るべき日よ／主の日が近づく。全能者による破滅の日が来る。(1:15)**「主の日」は預言者アモスが民の不信仰に対する裁きの日としていますが、ヨエルは民の不信仰については、一言も触れていません。ユダを襲う諸国へは、神の裁きがあることを伝え、神は**必ず復讐せずにはおかない(4:21)**と激しく述べています。「その日」をヨエルは**その時／主がご自分の国を強く愛し／その民を深く憐れまれた(2:18)**と言って「偉大な御業の成就の日」と捉え、恵みを喜び、賛美、感謝の日と信じました。民が裁かれるのではなく、民が救われる日であるとヨエルは預言しています。特に、その日の後に、**その後／わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し／老人は夢を見、若者は幻を見る。(3:1)**と、主の霊の降臨を預言しています。主の霊によって、息子や娘は預言する者となる。先祖から受け継いだ信仰を、親が、愛情と誇りを持って、子や孫へ、さらの後の世代へと、忍耐強く語り伝え、民が一つになって祈れと予言しています。**老人は夢を見、若者は幻を見る**という希望と喜びに溢れ、その日を迎えるのです。

ヨエルは「**ヨシャファトの谷**」という言葉を用いて、南ユダでは3代目の王ヨシャファトを想起させています。ヨシャファトは信仰に立つ王でしたが、北イスラエルとの連帯、融和をも模索する王でした。特筆すべきは、**高官たちを遣わして、ユダの町々で教育を行わせ(歴下 17:7)、ユダのすべての砦の町に、それぞれの町の裁判官を立て(歴下 19:5)**たことです。教育に心を砕き、公正な統治を求めた王でした。周辺諸国を打ち破った時、ヨシャファトの軍勢はベラカの谷に集まったと記されています。ヨエルはこの故事を思い起こし、主の霊が注がれる「主の日」の喜びを待つようにと告げました。

ヨエルの言葉をペトロが継承しています。人知を超えた聖霊が、ペンテコステの日一同に与えられ、ヨエルの預言の成就を告げて、ペトロは説教を始めています。(使徒2:14)